

絵本の中で育つ子ども

絵本の中に子どもならではの姿が描かれていると、よく育つた子どもを見つけたようなうれしい気持ちになります。そんな子どもたちを一人一人紹介していきたいと思います。

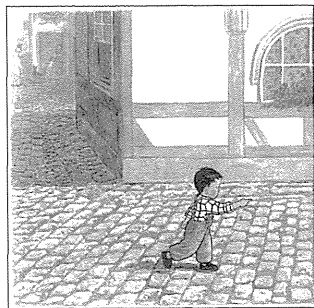
まずは『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』の「ぼく」に登場してもらいましょう。表紙に描かれた、はだしで誇り高く立っているこの子は三歳になったばかりというところでしょうか。物語の始め、おばあちゃんから電話がかかってくる。この子はここで二つの予測を持つことになります。つまり、題名にある通り「家の前の、いななみち」をまっすぐまっすぐ歩くとおばあちゃんの家に着く」と

という予測と、

「おばあちゃんの家かどうかは中をのぞいて確かめるとわかる」という予測。

この誇り高い三歳児は、「まっすぐ」という大事な事を忘れないように指さしながらひたすら進んでいきます。

しかし、歩きだしてすぐにこの子は道から外れた草むらに入ってしまった（なぜなら大人の言う「まっすぐ」は道なりに進むという



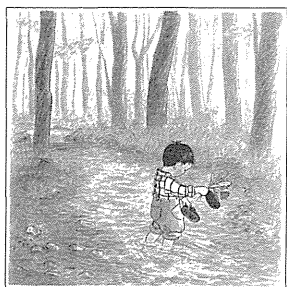
▲『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』から

永倉みゆき
(大学教員)

永倉みゆき（ながくらみゆき）
静岡県立大学短期大学部こども学科教授。
絵本そのものも好きですが、絵本と子どもがかかわることとでさらなる面白さが生まれるように感じています。

ことだからです。道はカーブしていましたが、何だか歩きにくい道だなと思うこともなく、「まっすぐ行ったらおばあちゃんの家があるはず」という自分の見通しを疑うこともなく、この子はまっすぐまっすぐ進んでいきます。

このまっすぐな道はなかなか面白い道で、赤い花が咲いていたり、チョウの大群と出会ったり、おいしい実（ワイルドストロベリーでしょうか）をポケットに入れたり、小さな一番の難題は、川にぶつかったこと。実は、ここの絵を見ると、ほんの少し目を左に向ければ、小さな丸木橋が架かっている、ぬれずに向こう岸に渡れるのですが、この子は「まっすぐ進む」という自分のやり方を守り通して（ぬれないように今までの経験か



▲『ぼくはあるいたまっすぐまっすぐ』から

ら靴を脱ぎ、ズボンの裾をまくって）川を渡っていきます。そしてほら、ちゃんと渡れました。なんていい考え！あの橋が「そうそう、坊やは坊やのやり方でいいんだよ」と言っただけで済んでいくようにも見えてきます。

この後にも、男の子の行く手を阻む難題は次々と降りかかってくるのですが、男の子はひるむことなくそれらの課題を自己流に解決していきます。例えば、登るのに大変そうな高い山にぶつかったときは（これにしてもちょっと回り道をすれば登らずに済むのに）、なんと後ろ向きに登って「高い」ということをわからないようにするという奥の手を使って登っていきます。よく、怖いものに出会った子どもが、目を固くつぶって目の前の現実を消してしまうように「見えなければ大丈夫」という子どもらしい知恵なんですね。この自己流に解決するところに意味があるのでしょうか。そうやってようやくたどり着いた家は、どう見てもおばあちゃんの家らしくない（それ

もそのはず、それは馬小屋ですから)。しかし「まっすぐ行つたらおばあちゃんの家」「わか
らなければ、のぞいてみればわかるはず」と
の自身の見通しを確かめるべくしつかりのぞ
いた男の子は、大きな馬の顔にびっくり仰天。
その次はなんと犬の家。これもよく考えれば
違ふとすぐ気付くはずですが、律義にのぞく
男の子。もちろん、そこにいたのは犬。そし
てついには蜂にも追いかけて、最後に行
き着いたのは、つるバラが外壁に這う素敵な
家。読者には、優しげなおばあちゃんの姿が
もう見えています。ようやくお目当てのおば
あちゃんの家に着きました。最後のページに
は、大きなチヨコレートケーキを前に、摘ん
できた大きなイチゴの実を誇らしげに渡す男
の子の姿があり、裏表紙には口の周りをケー
キのくずだらけにしておいしいおいしいチヨ
コレートケーキをほおばるところが描かれて
います。最後に作者はこの子に何と言わせた
と思いますか? 「おばあちゃんのおうちや

っぱりまっすぐだった」ですって。これを読
んだ私は「うーん」とうなつてしまいました。
これはただの「ある勇敢な子どもの冒険譚」
ではなく、どの子どもが通る成長の話だったの
です。

野村庄吾著『乳幼児の世界』^{註2}に次のような
文があります。「このような自分が出はじめ
た三歳児は、主体的に『自らが行く』誇り高き
騎士ですから、外から抑制したり、やろうと
している鼻先を禁止したり、手伝つたりして
自尊心を傷つけるようなやり方をされると、
かえつて聞きわけがなく駄々っ子のようにな
つてしまいます。」(「美しき三歳」)。子ども、
特に三歳くらいの子どもには、「自分はいつも
正しいことをやっている」「僕つてちゃんとや
つていける」という有能感が必要ですし、それ
を守り育てていくのが大人の役目だと思いま
す。そうだとすると、男の子をちよつとした
冒険に誘い、やり遂げて自信がついたところ
でおいしいごちそうでねぎらうおばあちゃん

は、なんて素晴らしい保育者なのでしょう。

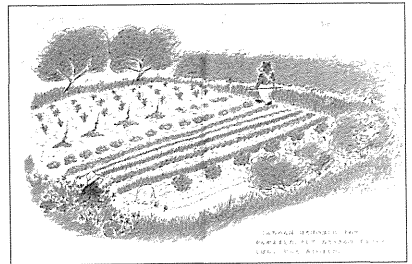
* * *

保育者といえ、この人の育て方も素敵です。『くんちゃんのはたけしごと』の熊のお父さん。子熊のくんちゃんは、自分のできることをいろいろやってみたい盛り。年頃でいったら、先程の「ぼく」と同じ三歳くらいでしょう。物語は、クッキーを取るため引き出しを足掛かりに戸棚によじ登り、降りるときに失敗してバケツに転落して床を水浸しにしたシーンから始まります。この頃の子どもは、自分の目的があると何とかしてそれを達成するために知恵を絞りますが、大概その方法は大人にとっては有難くないものなのです。かの有名な「おさるのジョージ」君も、『ろけつとこざる』^{注4}の話の中で、手紙を書くためにペンにインクを入れようとしてインクをこぼし、こぼしたインクを何とかしようと粉石けんを掛けてホースで水を掛け、部屋が水浸しになるといった場面がありました。やろうとして

いることは正しいのに、少々方法が合わなかったために大変な結末になってしまうのが、この年頃の子どもの常なのでしょうね。このくんちゃんがバケツに落ちたところを見て、横で拭き掃除をしていたお母さんはちよつと驚いた表情をしますが、悪気なく邪魔をしてくれる息子を叱りもせず、「外へ行ってお父さんの畑仕事のお手伝いでもしたら？」なんて優しい提案をして体よく夫に育児を押しつけるあたりは、なかなかの夫使い上手と言えます。一方、このやりたがり坊やを託されたこのお父さんも、普段からなかなかのイクメンと見えて、くんちゃんのお手伝いを快く受け入れてくれます。このやりとりを見ていると、やっぱり大人のチームワークがあつてこそ、子育ての大変な時期が乗り越えられるというものだという気がしてきます。

さて、お父さんの畑仕事を手伝えることになつたくんちゃんは、早速熊手を取り上げて、畑をならすまねを始めます。ところがそこは

今まさにお父さんが種をまいたところだとうことで失敗、失敗。そんなことにめげもせず、次にはお父さんのやつたようにジョウロで水をやるくんちゃん。ところがくんちゃんが水を掛けたのは雑草だったので、これもまた失敗。「雑草は抜くものだ。ほら、こうやって」と言われたくんちゃんが、それではと草を抜けば、今度は「違う、違う!」おまえが抜いているのは花じゃないか」と言われる始末。それから後も、くんちゃんがやることなすことは、ことごとくお父さんから「違う、違う!」と言われてしまいます。いったい幾つ失敗を繰り返したことでしようか(六回もなんですよ)。しまいにはさすがのくんちゃんも……お手伝いをめげて放り出してしまったのでしようか。いいえ、そうではありません。くんちゃんは、ようやくそこで、立ち止まって考えました。それまでは、やるやる、とすぐに飛びついて手伝っていたくんちゃんが、初めてお父さんのすることをじつと見る



▲『くんちゃんのはたけしごと』から

のです。くんちゃんとお父さんのアップで描かれていた今までの絵と違い、ここでは少し引いた絵になっていて、くんちゃんの小ささと、畑仕事が行われていた広い世界が対比されます。ようやく、くんちゃんは、やりたいことだけを見る点的視点でなく、全体を見る視点を持つのです。そして、どうやったらいいか、自分なりに考えます。じつくりと、しっかりと。子どもがぐんと育つときには、こんな時間が流れるのかもしれない。

しっかりとお父さんのやり方を見たくんちゃんは、もう間違えません。そして手際よく畑仕事の手伝いを終えたとき、お父さんからこう声を掛けられます。「それでいい。なかなかうまいじゃないか」。それを聞いたくんちゃん

の誇らしそうな顔といったら。

お父さんは、「さつきよりうまくなったな」なんて以前と比較して褒めたりはしません。しつかりその子の「いま」だけと向き合い、評価してくれるのです。私たち大人は、このくんちゃんのお父さんほどに、子どもが常に新しい自分である「いま」と向かい合おうとしているでしょうか。「いまある自分」の先に「ありたい自分」「なりたい自分」を持つことが子どもの育ちであるのであれば、その可能性も含めて褒めることが大人の大切な役目ではないでしょうか。ここにも私は保育の重要な視点を見る思いがします。

* * *

くんちゃんと、『ぼくはあるいた……』の「ぼく」はちよつとタイプが違います。くんちゃんのように何事にもすぐに飛びつき、考えるよりも前に実行している子どもが、どのクラスにも一人くらいはいるのではないのでしょうか。一方で、「ぼく」のように静かではあ

るけれど意志は固く、思い込んだらどこまでやるタイプの子ともいそうですね。日常の保育とは違ってこんな絵本の中で出会おうと、どちらの子も年齢相応によく育っているものだと感心してしまいます。

現実の保育を振り返るばかりでなく、時には絵本の中でいろいろな子どもについて考えてみると、違う発見があるのかもしれない。



▲『ぼくはあるいた
まっすぐまっすぐ』から

参考文献

- 1 マーガレット・ワイズ・ブラウン作／坪井郁美文／林明子絵『ぼくはあるいたまっすぐまっすぐ』ペンギン社 一九八四年
- 2 野村庄吾『乳幼児の世界——こころの発達——』岩波書店 一九八〇年
- 3 ドロシー・マリノ作／間崎ルリ子訳『くんちゃんのはたけしごと』ペンギン社 一九八三年
- 4 H・A・レイ作／光吉夏弥訳『ろけつとこざる』岩波書店 一九九八年